

マーシャル諸島米核実験の「その後」 ——核災害からの「再生」・「復興」はあるのか



竹峰 誠一郎

核兵器禁止条約（2017年7月締結）

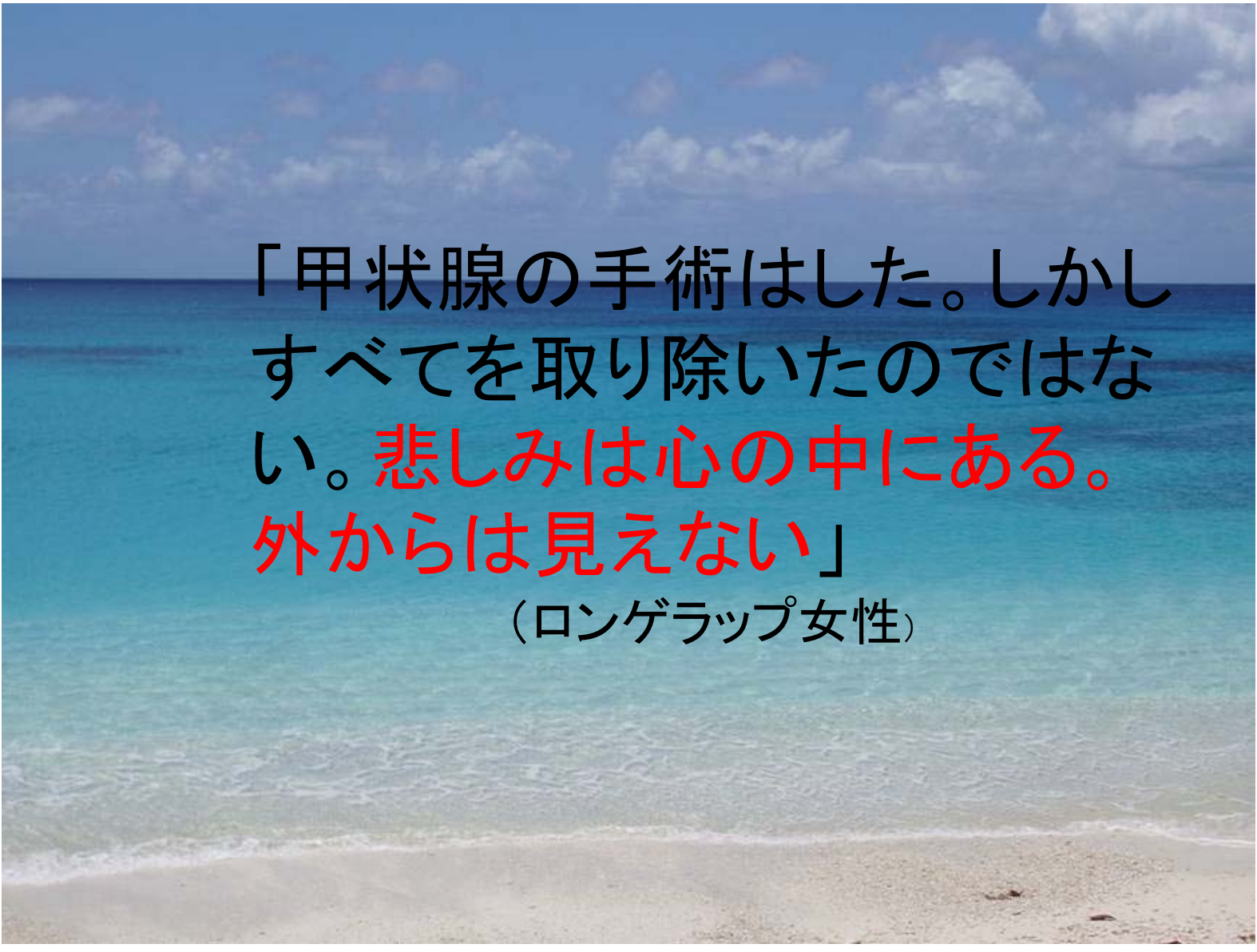
・前文「核兵器の使用の被害者（ヒバクシャ）及び核兵器の実験により影響を受ける者にもたらされる容認し難い苦しみと害に留意」

「核兵器の活動が先住民族に過重な影響を与えることを認識」

・第6条 被害者に対する援助及び環境の回復

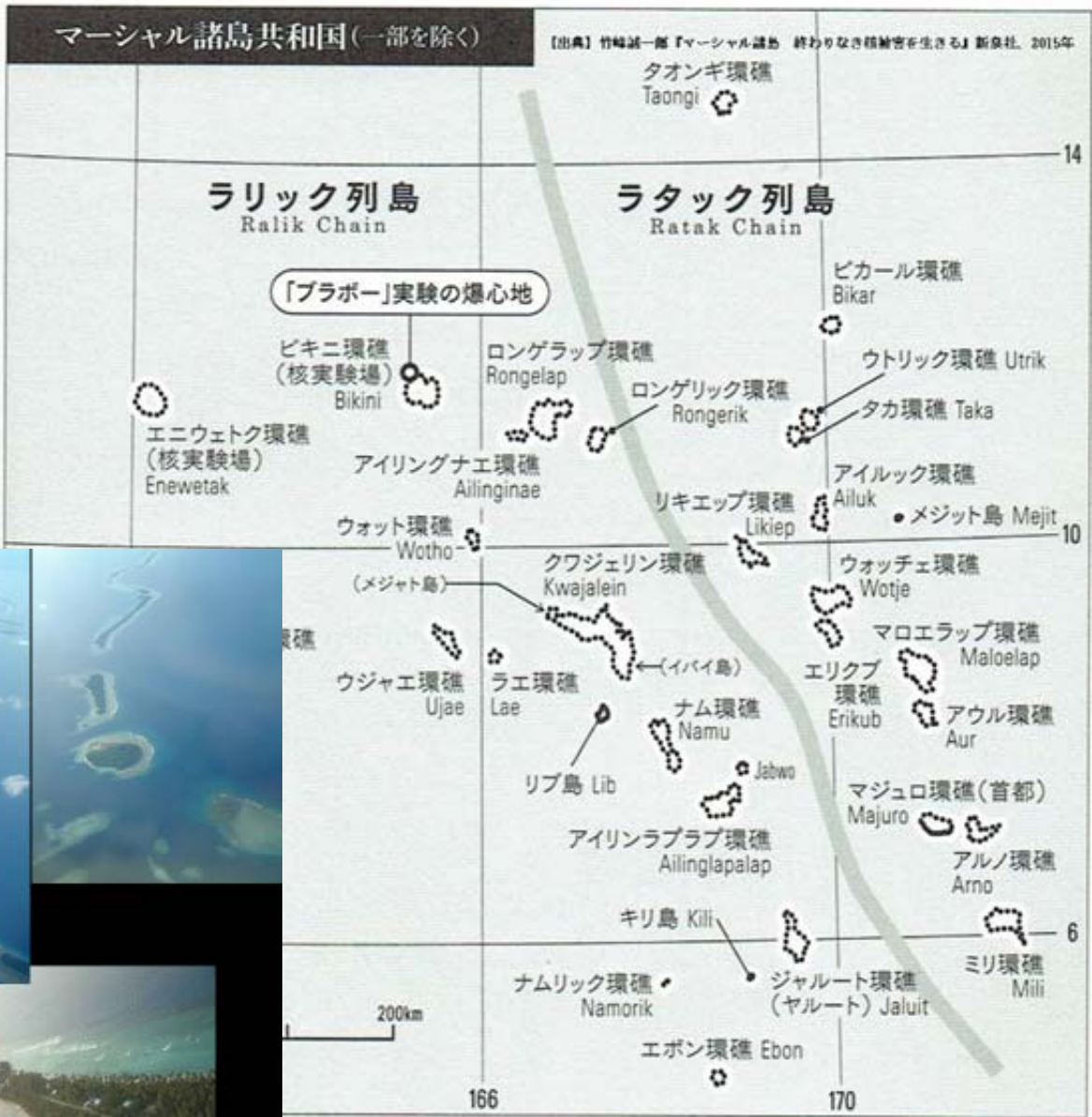
・第7条 国際協力および援助

「核兵器その他の核爆発装置の使用又は実験の被害者のための援助を提供する」



「甲状腺の手術はした。しかし
すべてを取り除いたのではない。
悲しみは心の中にある。
外からは見えない」

(ロンゲラップ女性)



「環礁」≠「島」

環礁 = 環状に連なる小さな島々

+ ラグーン + オーシャン

2017/11

ビキニ住民代表

ヘンチ・バロス

「68年には大統領
みずから安全宣言。

70年には、さあ準備が
できました、島にお帰りください。

75年には、ちょっと毒が出たが、まあ大丈夫。77年
になると食物は外部のものにしよう。そして今度は、
島に帰るな、出て行け。いったいこれはどういうつ
もりだ」（前田哲男 [1979] 『棄民の群島—ミクロネシア
被爆民の記録』時事通信社）。



写真4-17 1978年4月27日、
米国とビキニの代表の間で会合がもたれ、信託統治領の高層外務官と
米エネルギー研究開発局（原子力委員会の前身）のロジャー・レイが、
ビキニの再開議を告げた（マツヒロ撮影）。
写真撮影・提供：豊崎徳光氏

ビキニの人びとの移住先 キリ島

ピーターソン
(男、1979年、キリ島生)

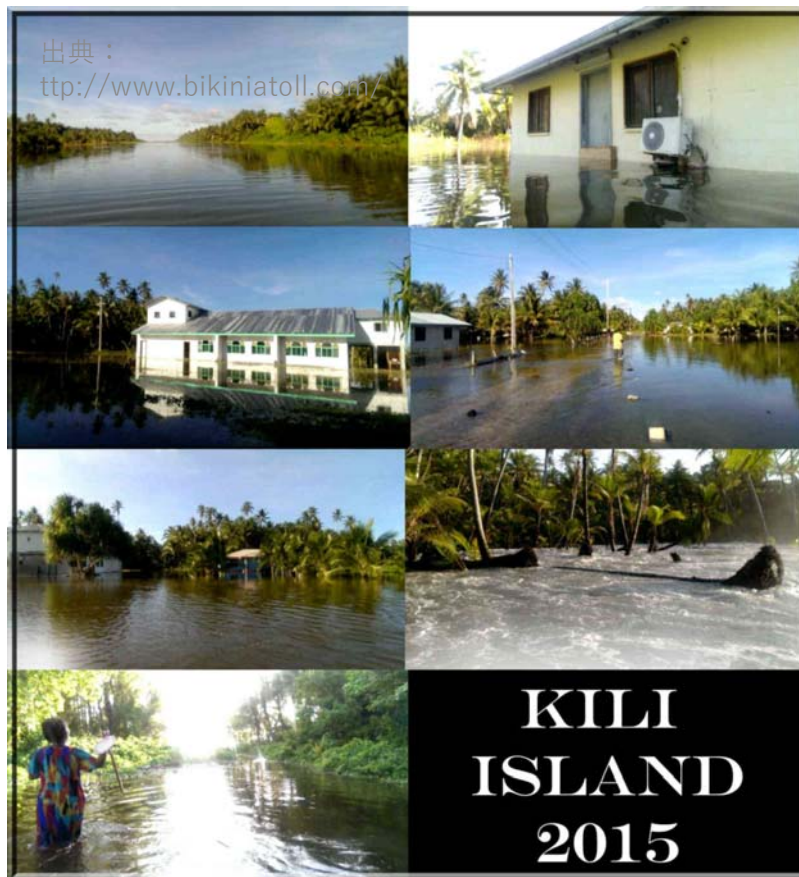
「エアコンはある。電気がある。それでいいじゃないかと、言われる。

でもおれらは、土地を奪われたんだ。土地は金よりも価値がある」





移住先に見られる海面上昇 ——生存を揺るがす新たな脅威



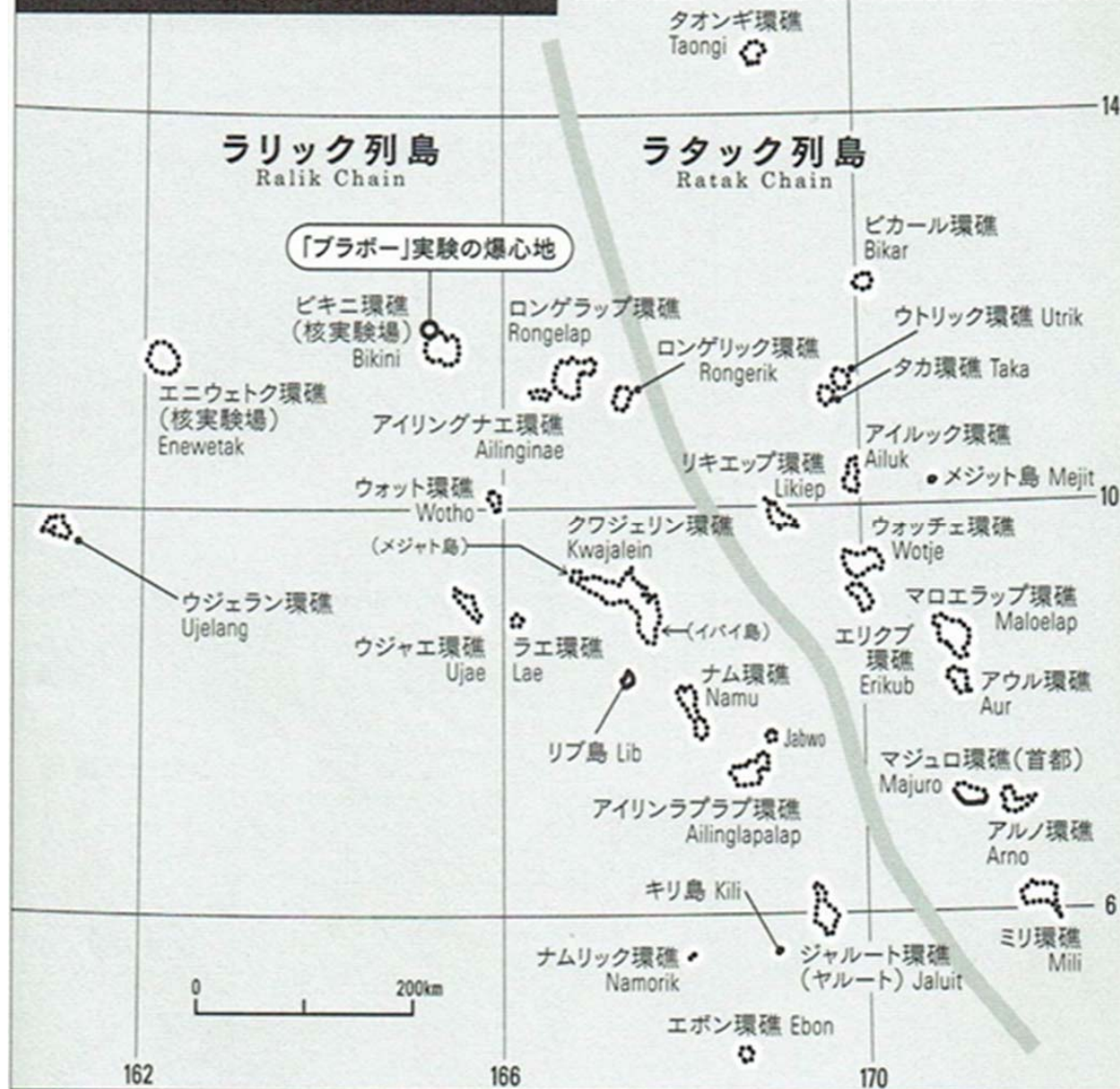
2014年 エジット島

核廃棄物誘致をめぐる動き

- 1980年代初頭から1999年まで
核廃棄物だけでなく、産業廃棄物、一般ゴミ処理場などを含
め誘致する動き
- 政府関係だけでなく、ビキニ自治体内部にも
- 1990年代 高まる反発
マーシャル諸島内 世論の反発
ビキニでも 住民集会で受入れ拒否
米政府 米エネルギー省長官反対表明
- 1999年 マーシャル諸島政府
受入れないことを表明

マーシャル諸島共和国(一部を除く)

【出典】竹崎誠一郎『マーシャル諸島 終わりのなき核実験を生きる』新泉社、2015年



エニウェトクの戦闘に巻き込まれた現地住民



写真3-1 地上戦で負傷した地元住民、
戦闘後、米軍の治療を受ける
(1944年2月、エニウェトク環礁マテレン島(マリイ島))、
所蔵：米国立公文書館



写真3-2 戦闘終了後、逃げまどいた住民に米兵が水を配給する
(1944年2月、エニウェトク環礁)、
所蔵：米国立公文書館



写真3-5 戦闘で島は一面焼け野原と化した(エニウェトク環礁)、
所蔵：米国立公文書館

「ルニットドーム」の建設光景

米国立公文書館(カレッジパーク)から収集



「ラディエーションとともにわれわれは生きている」

現在のルニットドームほか



1954年3月1日 水爆「ブラボー」実験のその後

「プロジェクト4・1
放射線被曝した人間に関する研究」

<写真>

左：米原子力委員会 コナード医師

右：被曝したロンゲラップ環礁の少年



米国立公文書館所蔵

ブラボー実験から3年後
1957年 ロンゲラップ住民 帰還



写真:ロンゲラップ環礁自治体長(当時)ジョン・アンジャイン氏提供

ロンゲラップ住民帰島 米政府の思惑

遺伝調査をおこなううえで
理想的な状況を作りだす。

広島・長崎で得てきた知見
にも勝るものになる

(1956年5月第56回 米原子力委員会
生物医学部諮問委員会)

放射性物質の利用が、研究や産業
の分野でますます普及し、……人間
が被曝する可能性が増している。

人間への影響の更なる知見が、大い
に必要とされている。

……被曝したマーシャルの集団は、
放射線の照射（外部被曝）、ベータ
線熱傷（体表面汚染）、放射性物質
の体内吸収（内部被曝）という、予
測し得るすべての被曝を受け負傷し
ており、最も価値あるデータを提供
する

(1957年3月追跡調査責任者

コナード医師による報告)

再居住計画の実施へ

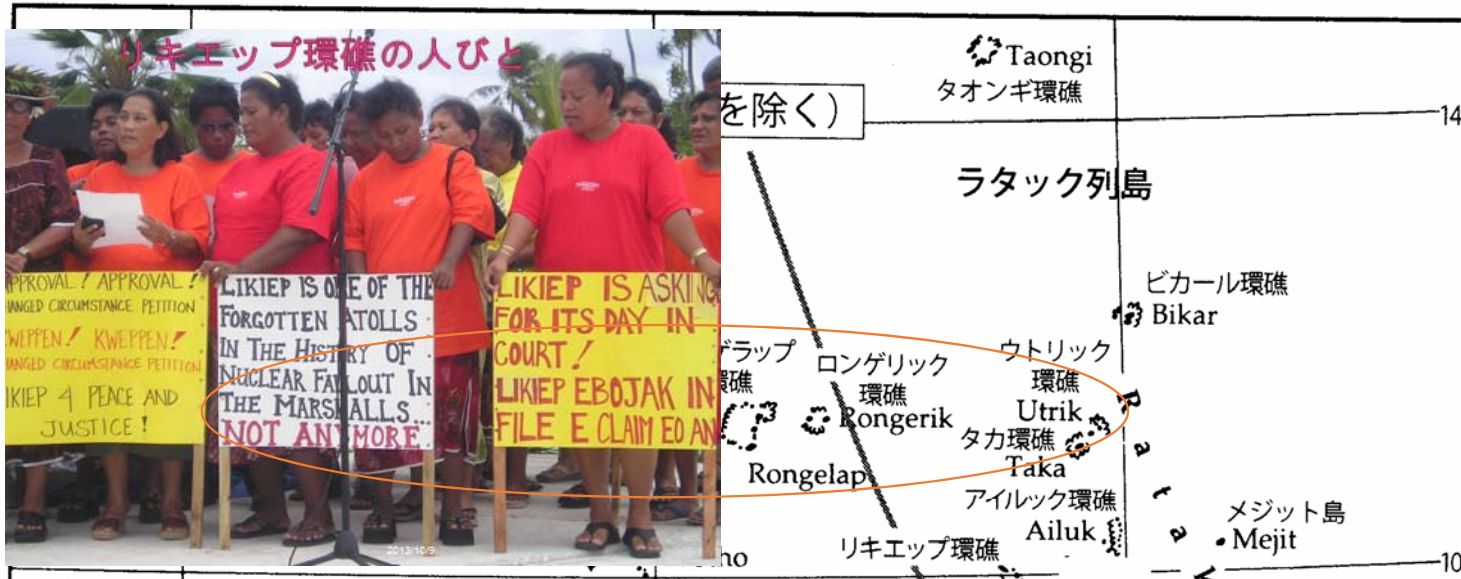
- 1996年9月、米内務省、ロンゲラップ自治体との間で、4500万ドル支払い、再居住計画の基金設立。
- 1998年、除染を含めた工事がロンゲラップの本島で開始

→生活拠点であった自分たちの土地を取り戻そうとする人びとの熱意と行動が、再居住計画の実施までこぎつけた

それから19年余り……



写真: グレース・アボン氏提供



Ujelang
ウジェラン環礁

ウジャエ環礁
Ujae

ラコ

* 下記出典に掲載されている地図に竹峰が一部加筆して作成。
(出典 : Firth, Stewart and Karvin von Storkirch , "A Nuclear Pacific" in Donald Denoon ed., *The Cambridge History of the Pacific Islanders*, Cambridge U.K., New York, N.Y., USA: Cambridge University Press, 1997, p327.)

0 200 km

162





Nuclear Legacy (核の負の遺産)



Nuclear Justice





**「否定し、嘘をつき、機密にする。
マーシャル諸島でなされたこと
が、福島でも繰り返されている。
これが核をとりまく文化だ」**

前マーシャル諸島共和国外務大臣 トニー・テブルム

竹峰誠一郎

マーシャル諸島

終わりになき 核被害を生きる



竹峰誠一郎

終わりになき核被害を生きる マーシャル諸島



9784787714114



1921036026002

ISBN978-4-7877-1411-4

C1036 ¥2600E

定価2600円+税

**避難・除染・再居住の問題、
暮らし・文化・心への影響、健康被害、
人体実験疑惑……**

ビキニ環礁、エニウェトク環礁。

かつて30年にわたり日本領であったマーシャル諸島では、日本の敗戦直後から米国の核実験が67回もくり返された。長年の聞き書き調査で得られた現地の多様な声と、機密解除された米公文書をついねいに読み解き、不可視化された核被害の実態と人びとの歩みを追う。

拓いていくのか
被曝地の未来を

新泉社

「第五福竜丸」
の後ろ側で
被曝を
生き抜いてきた
人びと

新泉社

日本は敗戦後、米国の核の傘のもとで安全保障体制を築き、戦後復興から急速な経済発展を遂げ、「平和」を謳歌してきました。その時、かつて自国領として「南洋群島」と呼んでいた太平洋の島々とその土地の人びとのことは、視野の外にありました。

米国の核を縮きしめを日本と、米国の核開発の目利きとなったマーシャル諸島の関係性は問われることなく、「被曝国」日本の戦後の「平和」は語られてきました。「第五福竜丸事件」は懸念されることであっても、第五福竜丸の後ろ側にいる現地住民への想像力は乏しかったと言わざるをえません。

六七回におよぶ米国の核実験にともない、マーシャル諸島は住民とともに大地が被曝し、地域社会、文化、生活、心、そして身体に、被曝は忍び寄っていきました。しかし、「被曝国」日本において、被曝がもたらしたこれらの現実には十分に探究されないまま、見過ごされてきたのではないのでしょうか。

——著者